発見！おごおり遺産

No.25 名月さん

今回のテーマは、名月さんです。多くの童謡にも歌われる「中秋の名月」は、わたしたちのくらしとどのようなつながりがあるのでしょうか。

家々をめぐる子どもたち

準備されたお菓子

名月さんとは、旧暦8月15日の満月の夜に月を鑑賞し、農作物を供えて豊穣（ほうじょう）に感謝を表す行事です。もともとその年に採れたばかりの芋を供えたことから「芋名月」とも呼ばれ、一般的には「十五夜さん」の名前で広く認知されています。

この日は、1年で最もきれいな満月を見ることができると言われ、旧暦8月15日が中秋にあたることから、「中秋の名月」と呼ばれます（中秋の名月と満月がずれる年もあります）。

日本人には古くから月を愛（め）でる感覚がありますが、この観月（かんげつ）の風習は、平安時代に中国から伝わったと言われます。当初は宮中（きゅうちゅう）の行事や饗宴（きょうえん）として行われていましたが、江戸時代以降に広く一般にも浸透しました。

なお、旧暦では月の満ち欠けで日付が決められるので、「中秋の名月」は毎年同じ日ではありません。ちなみに、昨年は10月1日で、今年は9月21日です。

名月さんでは、茹（ゆ）でた芋を月光が射す場所に供え、ススキや団子、お神酒（みき）を供える家もあります。この行事の主役は子どもたちで、「名月さーんな、上がったのー、上がったなーら、引かせんのー」と家々を回り、お供え物を分けてもらいます。かつては、芋・団子・みかんなどが対象でした。

現在は市内でもあまり見られなくなった名月さんですが、大板井、小板井、福童、西島、津古などでは伝統が引き継がれています。大板井では、当日夕方になると、地域の小学生が集まり始め、それぞれがグループになって「名月さん、上がったのー」「名月さん、上がりましたか」と各家を回ります。

現在のお供え物の中心はお菓子で、準備した家は玄関の明かりを灯し、参加できない家は明かりを消しておきます。子どもたちは、明かりの灯った家々を練り歩きながら、リュックサックやカバン一杯にお菓子を詰め、笑顔で帰途につきます。

近年は若者の間でハロウィンが流行していますが、日本にはもともと「名月さん」があります。コロナ禍が少しでも早く収まり、また子どもたちのたくさんの笑顔が戻る日を待っています。

問合せ先　文化財課☎75・7555

おごおり遺産とは？》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと